

■研究・実践の課題（テーマ）

学校における「食に関する指導」が保護者の意識変化に与える影響

■主任研究者 和泉秀彦

■共同研究者 松下英二、岸根美絵

■研究・実践の目的、方法、結果、考察や提案等の概要

【目的】

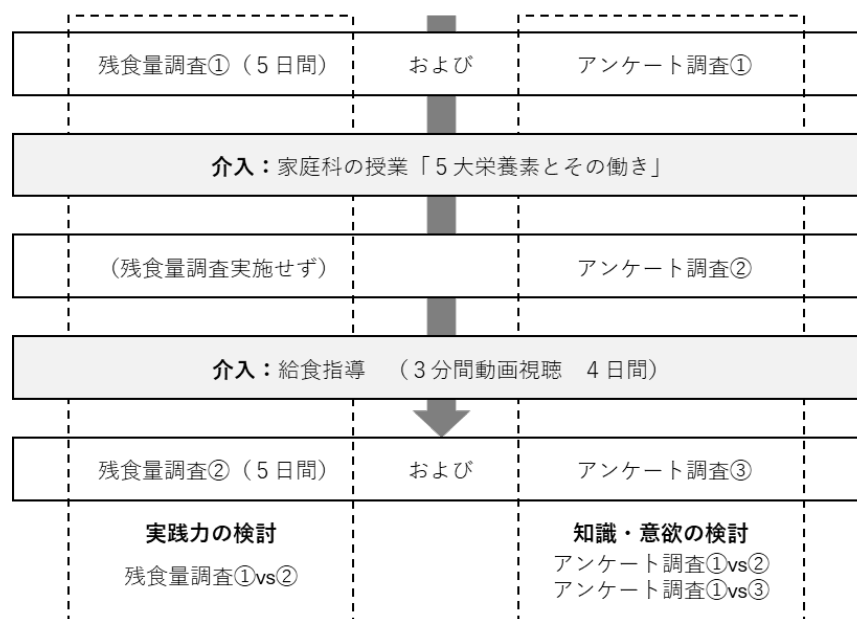
食環境の多様化により児童の少食や偏食、食生活の乱れなどが問題視され、学校では知識の定着だけでなく「食を選択する力」「望ましい食習慣」の習得など、食行動の変容を目指した食育の推進を図ることが重要視されている。学校での食育の役割は大きくなっているものの、栄養教諭の全校配置が義務化されていない現状において、食育は家庭科や社会科等の食に関する単元に留まり、その教育効果についても明らかになっていない。

本研究では、学級担任や教科担任と連携して栄養教諭が行う授業の教育効果と、さらに給食を教材とした給食指導を実施することで、食に関する知識・意欲・実践力という学習目標を達成できるのか検証した。

【方法】研究デザイン：観察研究

対象：三重県 K 小学校 5 年 1 組 35 名（男子 18 名女子 17 名）2 組 35 名（男子 18 名女子 17 名）計 70 名

アンケート調査の解析は、全 3 回の調査に参加できた 53 人を解析対象とした。知識・意欲はアンケート調査から、実践力は給食の残食量から評価した。いずれも家庭科授業、給食指導前後で比較検討した。



【結果】

① 実践力の結果（給食残食量調査）

家庭科授業および給食指導前後の給食残食率（％）の変化については、主食、主菜、副菜、汁物の全てにおいて有意差はなく、欠席者の分も児童らがお代わりで喫食していたため、0％以下を示していた。

② 知識の結果（アンケート調査）

家庭科授業前のアンケート調査①の知識の平均点 1.3 ± 1.2 点に対し、授業後のアンケート調査②では、 3.8 ± 2.5 点と有意に上昇した ($p < 0.001$)。給食指導後のアンケート調査③の時点では 3.7 ± 2.6 点であり、アンケート調査②と比較して有意な変化は見られなかった ($p = 0.800$)。

③ 意欲の結果（アンケート調査）

意欲についての4項目の推移は、「給食を残さず食べようと思いますか」については、多くの対象者がアンケート調査①から「思う」と回答した。指導による変化は見られなかった。

「五大栄養素について家族に話しましたか」については、アンケート調査①時点では少ない状況であったが、アンケート調査②③時点で、過半数以上の対象者が学校で学んだ五大栄養素について家族との会話が増えており、それぞれアンケート調査①よりも有意に高い割合であった ($p < 0.001$)。

「ご飯を食べるときに五大栄養素を意識していますか」について、アンケート調査①では過半数が意識していない状態であるのに対し、アンケート調査②では、意識している者の割合が増え、意識していない者の割合が減少した ($p < 0.001$)。アンケート調査③時点において、アンケート調査②と比較して有意な差はみられなかった ($P = 1.000$)。

「五大栄養素について自分で勉強をしていますか」に関しては、アンケート調査②において、勉強したと回答する者がアンケート調査①と比較して有意に増えた ($P = 0.007$)。アンケート調査②と③に有意な差はみられなかった ($P = 0.744$)。

【考察】

・残食率が指導前から低い理由として、栄養教諭による食育、学級担任との連携、児童の嗜好を考慮した給食献立への配慮が影響していると思われる。

・食に関する単元と給食指導を組み合わせることで知識と意欲の相乗効果が図られ、より大きな教育効果が得られることが明らかとなった。

【今後の課題】

児童が情報を効果的に学び取るには、給食指導での繰り返しだけでなく、個々の理解度に合わせた学習支援が必要であり、その方策について検討したい。